

【編集後記】

外交官—陸奥宗光と小村寿太郎。そして、陸奥の原点、父、伊達千広のこと

今、日本経済新聞朝刊で、現代日本を代表する作家の一人、辻原登氏（和歌山県出身）による『陥穽（かんせい）～陸奥宗光の青春』が連載されている。サブタイトルから、陸奥が外交官となる前の、エネルギーに満ちたドラマチックな時代（34歳で禁錮5年の投獄も経験）が描かれるのであろう。今まで多くの「陸奥宗光」に関する評伝や物語が著されてきたが、綿密な渉猟に作者のイマジネーションが膨らみをあたえ、一際興味深いものとなるであろう。

東京霞が関の外務省の正面玄関を入ると右手に、台座を含めると高さ5m近くもある「陸奥宗光像」がそびえる。歴代外務大臣の中で、外務省に像が立つのは陸奥だけで、その近代日本外交史上における歴史的評価を物語るものである。ただし、これは、1966年に再建されたものである。元の像は、1907年、陸奥の功績を讃え、没後10周年を記念し、建立された。当時の原敬内務大臣らが発起人に、賛同者に伊藤博文、西園寺公望、井上馨、板垣退助、山縣有朋、渋沢栄一ら、歴史の教科書を見るような名が連なる。

この像は、1943年、第二次世界大戦での金属供出の一環として撤去された。しかし、像の頭部だけは（将来の再建を期して）供出せず、外務省の他の重要な物品とともに保管、栃木県に疎開し、戦後、再び外務省に戻された。現在の像は、東京芸大教授山本豊市氏により新しく制作されたもので、1966年12月、当時の佐藤栄作総理ら200名が列席し、除幕式が行われた。

頭脳派で機略にも富み、弁も立つ切れ味の鋭さから、「剃刀大臣」と呼ばれた陸奥宗光の政治家・外交官としての最も大きな功績は、幕末に米国総領事ハリスをはじめ、諸外国から強硬に押し付けられた不平等条約である「治外法権・領事裁判権」（※当時の孝明天皇は、この条約締結の勅許を拒否、条約の署名は、14代将軍徳川家茂の名が記された）の撤廃（この功により、1894年、陸奥は子爵を叙爵）と日清戦争後の下関条約で、全権大使として、日本に有利な条件で終結させたことである（この功で1895年、伯爵の称号・勲一等旭日大綬章）。

「領事裁判権」における典型的な悲劇が、陸奥が外務大臣に就く6年前、1886年10月に起きた「ノルマントン号事件」である。横浜から神戸に向かっていた英国の貨物船、ノルマントン号が嵐のため、和歌山県沖で沈没、英独の乗組員26名は救命ボートで脱出したが、日本人の乗客25名はボートにも乗れなかった。全員死亡したにも関わらず、英国人判事による海難審判は無罪とされた。

不平等条約の改正は、日本の悲願であったが、困難を極めた。陸奥は、大国英国とロシアの關係に着目し、ロシアの東アジア進出を警戒し、その勢いを止めたい英国に日本が協力する条件として、英国との間で領事裁判権を撤廃させることに成功した。そして、同様の条約を結んでいた米独伊仏等15カ国も次々と英国に追随した。

しかし、陸奥は持病の結核の悪化により、1896年に外務大臣を辞任、翌1897年、53歳で亡くなった。

もう一つの不平等条約である「関税自主権」を勝ち取ったのは、現在の宮崎県、日向国飫肥藩出身の小村寿太郎である。陸奥より11歳下で学業優秀で名を知られ、陸奥が自らの跡をたのむべくスカウトしたといえる。

1904年2月、日露戦争勃発、日本が勝利し、1905年9月、米国ポーツマスで日露講和会議が開かれた。小村の外務大臣としての冷静な交渉力、粘り強さは、仲介役を務めた米大統領セオドア・ルーズベルトも驚くほどであったという。日露戦争での勝利等を日本の国力を示す追風とし、小村は条約改正交渉を進めた。そして、1911年、幕末から半世紀を経て、ようやく日本は関税自主権の回復に成功した。

ちなみに、小村寿太郎の銅像は、外務省にはないが、東京都台東区の朝倉彫塑館には、4m程もある小村の銅像が、大隈重信らの銅像とともに展示されている。宮崎県日南市にも別の銅像が展示されている（わたしは、彼の郷里の記念館で、小村の等身大のパネルや、講和会議で着用していた正装の展示を見たことがあるが、その小ささに驚いた。小柄で華奢な中学生のような小村が、講和会議で大柄な外国人達を相手に奮闘したのだ…と）。

ここで、少し、陸奥の父について記したい。陸奥は幕末の1844年、紀州藩士伊達千広（1802～1877。本名宗弘。雅号に千広、自得居士）の第六子として、和歌山城下に生まれた。父は、紀州藩十代藩主徳川治宝の庇護を受け、重用され、紀州藩勘定奉行、寺社奉行、熊野三山寄付金貸付方有司総括等を務めた。『南紀徳川史』には「千広は御勘定奉行之筆頭にて、一位様（治宝）御意に叶い、威権飛鳥も落る勢にて…」とあり、緻密な頭脳と幅広い教養、プロデューサー的手腕も有し、華々しく活躍した。彼はまた、多くの文集、歌集、紀行、歴史書を著した（後に東洋史学者内藤湖南は、千広の歴史書『大勢三転考』を、『大鏡』『愚管抄』『神皇正統記』『読史余論』と並ぶ歴史的著作と評価した）。

しかし、1852年、家老山中筑後守が急死し、権力者であった徳川治宝公が老齢（83歳）で相次ぎ亡くなるや、藩主慶福を擁する水野土佐守は、直ちに粛清にとりかかった。水野は、新宮3万5,000石の城主であり、代々の江戸詰家老。幕末の将軍継嗣の際、井伊直弼と結び、大勢の支持する一橋慶喜を斥けて、家茂（慶福）を擁立することに成功した実力者である。

治宝公の死から喪もあけないわずか5日後、千広や山中筑後守の子息達、治宝公に所縁のある数十名の地位ある人々が、幽閉、追放、改易、転役等のお咎めを受けた。簡単な申請書に記されたお咎めの理由は、贅沢との噂と公辺の御趣意、という甚だ曖昧なものであった。千広は、罷免され、政敵安藤飛騨守直裕が城主である田辺へ「御預け」となった。

その後、八代藩主重倫公の33回忌の特赦によって幽閉を解かれ、和歌山城下に帰還するまで、実に9年間を安藤邸内の一室で、千広の言葉によれば「籠にこめられし鶯のごとくしをたれて」侘しい囚われの日々を過ごした。（しかし、この間の孤独な思索と仏教研究への邁進は、彼の思想や人格を陶冶し、後半生の活躍につながった。赦免後、千広は上洛して様々な知遇を得、また、坂本龍馬ら脱藩浪士達も千広を尊敬し、伊達家を訪ねては議論した。陸奥と9歳年上の龍馬との最初の出会いであった。）

父がお咎めを受けたとき、宗光はまだ8歳。義兄伊達宗興は家禄を没収されて和歌山城下十里払いとなり、高野山麓の鯉野村に移った。宗光は、虎のように荒れ狂い、床の間の先祖重代の刀を抜いて、飛び出そうとした。年の離れた義兄宗興に叱られ、食ってかかり、「復讐、復讐……」と、口癖のように叫んでいたという。

困苦と窮乏の生活を経て、後に宗光は、14歳で高野山から、江戸に出て、学ぶ。そして、勝海舟の海軍操練所や坂本龍馬の海援隊に入り、行動を共にする。陸奥の波瀾万丈でジェットコースターに乗ったような生涯は、父譲りのものかもしれない。

ところで、伊達家の嫡子である宗光が、なぜ「陸奥」姓を名乗ったのか。宗光は、父伊達千広が42歳の時、第六子として生まれたが、彼が生まれるまで男子がなかったため、1836年、紀州藩士成田弥三右衛門の五男（当時13歳。後の五郎宗興）を養子として迎えていた。宗光は、祝福されて生まれたが、家督は、宗興が継いだ。

後年、宗光は、独立して陸奥家を興した。元々、伊達家は、陸奥の国伊達郡の出身であることから、一郡の主よりも、一国の主たらんと気概からつけられたという。

（谷 奈々）